

## L. ブルーニの「美による統治論」

### —(2) 市民の心の美しき都市 *beneficentissima civitas*—

佐藤 眞典

(2001年9月28日受理)

#### L. Bruni's theory of "city-state governed by the beauty" (2) *beneficentissima civitas*

Shinsuke Sato

This paper offers translation of latter half part of L. Bruni's *Oratio de Laudibus Florentinae Urbis* from Latin to Japanese and necessary preparation for the main discourse.

#### Key words:

キーワード：ローマ帝国、フィレンツェ、ガイウス＝カエサル、カリグラ、コルネリウス＝タキトゥス

本稿は、昨年公開した論文「L. ブルーニの「美による統治論」—(1)古代アテネを模倣した都市・市民論：形の美しさ—」広島大学教育学部紀要 第二部（文化教育開発関連領域）第49号（2000）、pp. 53-61で試訳したレオナルド＝ブルーニ著『フィレンツェ市讃美についての演説』（Leonardo Bruni, *Oratio de Laudibus Florentinae Urbis*）の後半部分である。尚、残りの最後の部分（「IV. フィレンツェの習慣と国制」）については次稿に付加した上で、本論を展開する予定である。

### 〔Ⅱ フィレンツェ住民はいかなる祖先から由来したか〕

今、その〔フィレンツェ〕都市そのものが何かは描かれた。次に、その市民たちがどのような種類の市民かを考察しなくてはならない。普通、ある特定の個人を論じる時のように、住民の場合もその起源を調べ、いかなる祖先から由来したか、またあらゆる時代に彼等が本国や他国で何をなしたかを考察しなくてはならない。かくの如く「キケロが言う如く」〔何事も〕起源から始めようと思う。

フィレンツェの人達よ、あなたたち住民の種族はどこから来たか、誰がその先祖か、いかなる人間たちによってこの秀でた都市は築かれたのか、ご存知ですか。あなたたちの種族や祖先をよく認識しなさい。あなたたちがあらゆる種族のなかでとりわけ高名で（*clarissimi*）あることに心を配りなさい。というのは、他の都市住

民の祖先は亡命者や祖国を追放された人々であったし〔f. 85 r〕、また、農民やどこの馬の骨ともわからない放浪者や名も無い建国者であった。しかし、あなたたちの建国者はローマ人であり、全世界の支配者であり、征服者であった。おお！不滅の神よ、あなたはこの一つの都市になんと多くの良いものを授けたことか。それがどこで起こり、何の目的で定めたかは問題ではなく、あらゆるものがその誉れのために役立てられている。というのは、フィレンツェ人は種族的にはローマ住民から興ったと言う事実はとりわけ重要なことであった。ローマ人ほど賢明で、力があり、あらゆる点優秀で抜きん出ている民族は地上にいたであろうか。彼等の偉業が余りにも際立っているので、他の人々によりなされた最高の業績も、ローマ人の偉業と比較するならば、子供のお遊戯（*pueriles ludi*）のように見える。ローマ人の支配は全世界に及び、最高の理性（*summa ratio*）で統治された。今までに他のすべての都市が生み出すよりも多くの有徳の士の模範が単一の都市から生まれた。ローマには、あらゆる分野に有徳の士が数限りなくおり、そのローマに匹敵しうる民族は他にはいない。多くの最高の秀抜な指導者や元老院の首領たちを除外しても、ローマ市以外にも、そこには、プブリコリー、ファブリキイ、コルンカーニ、デンターティ、ファビイ、デッキイ、カミリイ、パウリイ、マルケッリ、シッピオーネス、カトーネス、グラッキ、トルクァーティ、キケローネス等の家族名が思い出されまいだろうか。事実、建国者のなかに高貴さを見出そうとするなら、

ローマ人ほど全世界で高貴な住民は決して見出せないであろう。富を見ようとするなら、そのローマ人より富裕なものはいない。大きさや荘重さを求めるなら、ローマ人ほどより高名で、栄光のあるものはいない。支配の広さを探すなら、武力によって、従属しない、また、ローマの権力に屈しない住民は大西洋のこちら側にはいなかった。それゆえに、全世界の支配権や相続財産の所有権は、相続権によって、あなたたちフィレンツェ人に属している。このことから、次のことが起こる。フィレンツェ人により遂行された〔f. 85 v〕すべての戦争はほとんど正義の戦争である。それは自らの領土を防衛し、又は、回復するために必要上遂行した戦争であるがゆえに、この住民が戦争で正義を欠いたことがない。事実、すべての法と権利がこれら二種類（防衛と領土回復）の戦争を合法と認めている。

祖先の栄光、高貴さ、徳、偉大さや荘重さが子孫を際立たせたものにしうるなら、フィレンツェ人ほど、その権威に値する住民は世界にはいない。というのは、すべての人よりはあらゆる栄光で遙かに秀でたそうした祖先から彼等は生まれたからである。現実にローマ人への従属を認めない人々が一体いるだろうか。奴隸 (servus) にしろ、解放された自由人 (libertus) にしろ、その人の主人又はパトロンの愛息と同様の権威を持つとし、愛息よりも優位に立つことを望んでいる。自らと住民にとって、そうした秀でた創設者や建国者をもつことはフィレンツェ市にとって決してふざけたい加減なものではないことははっきりしている。しかし、歴史のいかなる時点でフィレンツェ人はローマ人から興ったのか。今や、王室の継承の場合、ほとんどの人々によって保守されている慣習がある。即ち、国王の相続人であると最終的に宣言される人物は、その父が国王の権威を持つ時に生まれていなければならない。その前か、その後のどちらかに生まれた子孫は国王の息子であるとは見なされないし、父の王国の相続権を持つことは許されない。彼の最良で最高に繁栄した状態の時に支配する者は誰でも、確かに、最も際立った栄光の偉業を達成もする。事実、一どのような方法かは分からないが— 繁栄した時代は人々の心を刺激し、偉大な精神 (spiritus) を奮い興す。そこで、歴史上そうした時点で偉大な人達は重要で栄光あることしか達成することが出来ない。その時達成されたことは常に特別際立っている。

従って、ローマ帝国が最も栄えた時、また非常に力のある国王や戦い好きの民族がローマ人の武器と徳力によって (armis et virtute) 征服されつつあった時、正にこの時、こうしたローマ人の大変高貴な植民地は建設された。カルタゴ、スペイン、コリントは倒され、

全ての領土と海がローマ人の支配を受け入れ、同じローマ人は外国からいかなる〔f. 86 r〕損害も被らなかった。更に、カエサル、アントニウス、ティベリウス、ネロ—これらは共和国の厄介者で破壊者—はまだ人々から彼等の自由を奪ってはいなかった。むしろまだ神聖・不可侵の自由は成長しつつあった。その自由は、フィレンツェ植民地の建設後すぐに、これらの下劣な盗人に剥奪された。こうした理由から、他のどの都市よりも秀でたこの都市で何が生じたか真実が分かる。特にフィレンツェの人々は完全な自由を享受し、僭主たち (tyranni) の最大の敵となっている。—私の考えだが— 正にその建国から、フィレンツェはローマ帝国 (imperium) の侵略者や共和国 (res publica) の破壊者への憎しみを学んだ。この日まで決して忘れなかった。これらローマの破壊者の事跡、又は名前さえもが今日まで残っているなら、共和国はそのことを軽蔑し、憎む。フィレンツェの住民にとってこうした関心は新しいことではなく、ある人達が言っているように、少し前に始まったものでもない。むしろ、僭主に対する戦いは、ある悪人があらゆる犯罪のうち最悪の罪を犯す時、即ち、ローマ人に対する自由、名誉、権威の破壊を企てた時から、ずっと以前から始まっていた。そうした時、論争や党派への愛着はフィレンツェ人から支えられた。こうした態度は今日まで続いている。

もし別の時代にかかる党派が異なった名前と呼ばれたとしても、まだ現実には分裂してはいなかった。フィレンツェは常に一体 (una) であった。ローマ帝国の侵略者に対する態度は、当初から今日まで、常にこうした政策の中で続いてきた。神の正義によって、当然向けられるべき古代の祖国への敬意によってというよりも、〔僭主への〕憎しみによって、引き起こされた。というのは、ローマ帝国は、カミルス、プブリコス、ファブリキウス、クルティウス、ファビウス、レグルス、スキピオ、マルケルス、カトーや無数の他の大変名誉ある人々によって演じられた徳力 (virtus) を備えていたが、いかなる徳力も持たないカリグラや怪物や僭主の手の中や支配下に帝国が陥るやそのことを誰が耐え得たであろうか。この点で秀でるために、〔f. 86 v〕これらの怪物たちは権力の配分の競争で全力を尽くした。これらの闘争の結果、彼等がローマには高貴さ、政治的活力や市民団体さえ残さなくとも、世界における最高の評価 (summum premium) があたえられるがゆえに、そこでローマ市民を全滅させるためにあらゆる残酷な手段が用いられた。そのため、カリグラはあらんかぎりの多くの犯罪を重ねた。その偉大な都市にまだ多くの市民が生存していた時、殺人や虐殺に疲

れて自らの残酷な欲望が満たされない皇帝は、最後に、彼の極悪非道の証拠となるあの悪魔的言辭を吐いた：

「ローマ人は一つの首しか持たなかった、そのため私は刀の一振りですれを撥ねることができた」。はっきりと彼は正にそのことを行動で示した。彼がもっと長生きしたなら、市民たちの血に満足しないで、その都市を空にしたであろう。加えて、元老院体制を通じて（senatorium ordine）刀を振り回し、非常に賢明である最良の市民たちが殺害され、コンスルや凱旋將軍の家族は根こそぎにされ、まだその都市に、いかなる平民が残っていようと、あたかも羊の群れの如くに、毎日虐殺された。まことに戦慄すべき残酷さにさらに恐るべき破廉恥行為が加えられた。これらの破廉恥行為はいかなる時代にも見られないし、匹敵するものもない。彼については呪いなしには思い出されなかった。彼自身の姉妹は、順番に、彼に凌辱され、それから、彼の妾として、公然と生活を共にさせられた。

これらは皇帝のやることであろうか。これらは多くの人々が、称賛に値する、と見做すカエサル行為であろうか。これらは何と言う破廉恥行為であろうか。これらは何と言う人間の奇怪な行為であろうか。こうした理由から、ローマ市がそうした部分への憎しみを持ったし、またこの憎しみが今日まで続いていることを誰も疑い得ない。今や、怒りへのもっと正当な理由は他にあるであろうか。少し前まで大いなる能力によって全世界を支配していたローマ人、その祖先や建国者が、最も犯罪的な人々の手でその自由を突然に失ってしまったのを見ることの残念さ以上にフィレンツェ人に関わりのあるものがあるだろうか。これらの人達は、もし共和国〔f. 87 r〕が存続しているなら、社会の最低の層の中に数えられる人達であった。

ティベリウス＝カエサルはカリグラの前に支配したとは言え、私は彼について何を語るべきか。秩序や理性の存在しない問題を論ずる時には、年代的な順序で話しを進める必要はない。事実、カプリのローマ市民を苦しめ皆殺した時にティベリウスによって行われた蛮行ほど嫌悪し恥多きことは今まで聞いたことも見たこともない。同皇帝の愛人（pisciculi）や男色者（spintrie）ほど悪いものはあり得たか。それらは性的態度の悪い語りぐたいタイプに入れられ、そこで生活するものを墮落させるそうした破廉恥行為の典型はイタリアの恥（pudor Italiae）と思える。これらの皇帝が下劣で悪なら、それに続いた人達はよりましと言えるか。それらは誰であったか。それらはネロ、ヴィテリウス、ドミティアヌスやヘリオガバルスではなかったか。勿論、そうだ。彼等だ。ネロの徳や人間性の性格がいかなるものであったかを明示することは容易な

技ではない。確かに、彼の母のアグリッパは天に向かって息子の慈悲を称賛した。母に対して慈悲を示す人が他の人々に対して無慈悲で非人間的でありうると考えられるだろうか。そこで憐憫の情に駆られて、ローマ市に火を放ったのは誰なのか。市民たちは寒さで打ちひしがれていたのだろうか。

おお、ガイウス＝カエサルよ！ 汝は何と公然たる罪をローマ市に見舞ったことか。しかし、私はこの事件を黙っておこう。というのは、一大変学識があり賢明な人間であるルカヌスが、これらの犯罪について、真実を書いたのを怒るものたちがいる。多分彼等は良き理由なしにはそうしない。というのは、汝は多くの大きな悪を示したが、これらは時折多くの偉大な徳により覆い隠されたから。ここでは最善の道はまったく汝について沈黙していることであった。汝について我々が知らないと同じ理由で、汝の息子〔養子：オクタヴィアヌス＝アウグストゥス〕についても扱わないであろう。しかし、私はこのすべてを見過ごそうとしている。私はその息子の馬鹿げた残酷さ、無実の市民の追放や嘲笑、元老院への裏切り、あるいは、性的倒錯のどれにも触れないであろう。というのは、彼の父にもあったように―息子にも、その欠点を許しうるものにしてている彼の徳の痕跡があった。汝が帝国を譲り渡したこれらの怪物たちは、強力な徳が全力で共和国を消え去らなくとも、また、どれだけ大きな破廉恥行為からも国家を遠ざけ得なくとも、いかなる徳によってもそれらの悪から身を引く〔f. 87 v〕ことはなかった。このため、汝のその他の事跡には触れないとしても、汝の後継者たちがあらゆる種類の不法行為や残酷さで示したあの多くの悪行と乱暴への道を汝が敷いたことを私は忘れ得ないし、怒っていないと考えてはならない。

しかし、何の目的で、と誰かが尋ねるのであろう。現実には、二つの理由がある。第一に、この〔フィレンツェ〕都市がそのような部分を不正に受け容れようとしないことを示すため。第二に、ローマ市が権力、自由、才能において、また、非常に賢明なる市民により共に大いに栄えていた時が、正に、その〔フィレンツェ〕都市が建設されたその時であることを理解してもらうためである。共和国が単一の権力に従属させられた後、今や、―コルネリウス＝タキトゥスが言うように―それらの際立った本性（ingenia）は消えてしまった。その時までにはローマ人のすべての徳や高貴さが消え失せたので、植民地がもっと後に建設されたかどうかが必要である。そうした都市を捨てて移動した人達によっては偉大な又は際立ったものは何一つ伝えられない。

フィレンツェは、その建国者として、何処でも誰に

よっても従属され、彼等の徳の力や武器によって支配されるものがすべて帰属する指導力を持っていたので、また、自由な不敗のローマ人が権力、高貴さ、徳や才能において栄えた時に都市が建国されたので、この一つの都市がその美しさや、建物や一我々が見ているように一場所の良さで際立っているだけでなく、フィレンツェはまたその起源の権威や高貴さで他の都市を大いに凌駕していたことはまったく疑い得ない。しかし、さあ、他の話題にかえよう。

### 〔Ⅲ. フィレンツェはイタリアで首位に立つためにいかなる技術を用いたか、都市の徳についてどのようなものが他にあったのか〕

フィレンツェがそうした高貴な祖先から生まれたので、不精や臆病により悪に染まることは許されなかったし、その先祖の栄光に浴することや、あるいは、安易に、又、安穩に榮譽の上に胡座をかくことに決して満足しなかった。そうした高尚な位置に生まれたので、フィレンツェは誰もがすることを期待し、望んだことを成し遂げようとした。かくして、フィレンツェはあらゆる徳でその建国者を模倣した。一皆の判断では一〔f. 88 r〕その都市はその立派な評価や伝統に完全に値するものと思われた。更に、フィレンツェは、イタリアの指導者の中でも先頭に立っていることを示すために、戦いから身を引くことはなかった。それ自体が支配や栄光を得たのは詐欺又は罠によってではなく、また、犯罪や欺瞞でそれを隠すことによってではなく、賢明な政治、危機に直面する意志、信用・高潔・不動心の維持や、とりわけ弱い人々（*tenués*）の権利を守ることによってであった。フィレンツェは富によって勝ろうとしただけでなく、その勤勉さと荘重さを更に一層高めようとした。正義（*justitia*）や人間性（*humanitas*）よりも権力（*potentia*）で優れているほうがよいとは考えなかった。これらの技術（*artes*）に留意して、フィレンツェは首位を占めようとした。これらでもって、その権威と栄光を獲得した。もしこうした政策に従わなかったら、賢明にも、又、真実にも、フィレンツェはその先祖の徳から遠ざかり、その高貴な祖先は名誉よりも重荷になることを知っていた。しかし、フィレンツェは最も賢明で最良の行動指針を選択した。子孫が自らの徳を得ようと努めているため、両親と同じ権威や素晴らしさがその息子たちをも照らし出す。もし子孫が臆病であるか、放蕩であるなら、あるいは、ともかくも徳を踏み外すなら、祖先の輝きは、それがそれらを明白にしたらろうように、それらの悪を大にかくすことはしなかったであろうことを

汝は確信している。両親の栄光は何も隠させない。事実、両親の徳は息子に繰り返されると言う期待が子孫に皆の目を集中させる。こうした期待の内に祖先の輝かしさに恥じない行動を執ることに失敗するものは誰でも高貴とは見られず、むしろその世襲のために悪名高くなる。しかし、祖先達の素晴らしさがちよほど墮落した人達を助けることが希なように、この同じ素晴らしさが高くして高貴な精神を持つこれらの子孫を数倍偉大にする。事実、それらの権威や影響力が大きくなるに従い、これらの人達は天国に運ばれる。彼等は、自分達自身の徳により又先人達の高貴さの故に、先祖と共に一つ所の同じ場所に置かれる。それらの偉業のゆえに多くの人々が優秀さの例として際立っているのを見てきた。そこで彼等の中にローマ人の徳〔f. 88 v〕やその精神の偉大さを認めることは大変容易となる。このために、フィレンツェはその世襲の業績と素晴らしさにより名誉づけられるのに対し、その都市はそれ自らの優秀さと業績によりなお一層名誉を与えられる。

一私は次の如く考えている一都市の起源の輝かしさについてすでに十分語ってきた。事実、明らかにこのこと自体は明白なことである。都市の優秀性について、すなわち、フィレンツェがどの様にして本国とその外で栄えたか、ここで語るべきであろうが、しかし、要約して語るべきであろう。ここでは完全なフィレンツェ史を語ることは許されない。むしろ、そのハイライトにのみ限定するのがよい。しかし、この事実に入る前に、誰かが間違った印象を得て、性急であるとか、無知であるとか私を非難することのなきように、私が何かを説明し、誰かに警告を発するのは適切で的を射たことかどうか考えている。性急さは軽薄さから生まれ、無知は愚鈍さから来る。両方が避けられるべきものである。非常に多くの馬鹿者が私を疑い、この称賛演説で以って人々の人気を勝ち取ろうとしているとか、暴徒の要求ばかりに諂おうとしているとか、私が出来るだけ人々の関心を買おうとしているとか考えていることは疑いない事実と思う。このように考えて、彼等は、私が真実の境界線を越えたのではないかと、話を美化するために嘘と真実を混ぜたのではないかと、信じている。そのような人達に忠告し、あるいはそのような人達の誤解を解いておきたい。そうすれば彼等は最早この様には考えないし、私の動機についての全ての疑いも解消するであろう。確かに私は誰にも愛され、受け容れられたいと望んでいる一私がこのことを望み、欲していることを公に宣言しておく一けれども、諂いやお世辞を使ってそれを得る欲望にまだ自らを失ってははいない。私について言うなら、私は、人は、悪ではなく、徳の実践を通して他の人に尊敬されるべきで

ある、と常々考えてきた。この称賛演説の結果として私が決していかなる人気を得ることも期待していないし、求めもしなかったことは確かである。事実、もし私がこうしたささいな書き物で非常に多くの人々の人気を買うことが出来ると考えていたとするなら、真に私は馬鹿者であろう。しかし、この美しい都市を見るや、その見事な景観や建物、その高貴さや快適さと、大いなる栄光に感嘆するや、私は、[f.89 r]話す(dicendo)以上に、その偉大な美しさや荘重さを普及させ(explicare)たいと思った。

これがこの称賛演説を書こうとしている理由であり、人気を博したり、住民の歓呼を勝ち取ることではない。事実、人気を得るためにこの仕事を企てたといったことからほど遠いが故に、この演説の結果、自分自身に対する良き感情以上に悪しき意志を起こさなければ私自身大変幸運であると考えている。むしろ、私が見る如く、大いなる危険は、フィレンツェが繁栄しているのを見ることを憎むすべての人達がこの称賛演説の結果私の敵となるだろうことである。実際に、現に今も私はこのことを恐れている。この称賛演説が、*<私を>*、*<フィレンツェに敵対するすべての人達や、フィレンツェ人により挑まれ、打ち据えられ、征服された人達、又は先祖がそうされた人達などの敵対者に>*仕立てるであろう。これらの人達は私を憎むであろう。従って、私自身のこの作品が私に対する敵意だけを生み出すことを大変恐れている。しかし、私はどんな正義ある人も拒み得ない条件を打ち出すであろう。もしこの演説で私が間違い、偏見、曖昧なことを話したなら、私は喜んで私の聴衆の敵意や反目を受けよう。しかし、私の言うことが真実なら、又、私が適切に言い表しているなら、聴衆は私に怒る理由がない。これ以上のフェアな言い方が他に在ろうか。もし、私がしようとしているすべてが適切で真実の称賛演説でフィレンツェを飾ろうとしているなら、私に怒りうるほど皮肉屋で悪意に満ちた人がおり得ようか。

今や、私が語るすべてから、人気を勝ち取るためにこの演説を構成したのではないことや、誰もが私に怒ることが正しいことだとは言えないことが明白となる。しかし、多様な性格の人々がいるので、私が意味のあるとした文章を余り価値がないととらえる人が多くいるだろうことも私は疑わない。そして、事実、真実それ自身が憎々しく、腹立たしい人々もいるだろう。まだ、他に、彼等の性格の卑劣さのゆえか、対象の問題への無知のゆえか、自己の利害に関わるものしか真実と考えない人々もいるだろう。これらの人々は内容がないと私を非難し、本当のことは何も書いていないと攻撃するだろう。こういう人々に次のように言いたい。

偽って私を捉えたり、性急に私を非難すべきではない。

[f.89 v] 常に自分達の見方が非難すべきものであることを悟るべきである。また、特に、私が語ろうとしてきたことは個々の市民の徳、あるいは優秀さではなく、共和国全体(universa re publica)についてであることを思い出すべきである。

もし、フィレンツェのある市民が些細な罪を犯したとしても、これは都市全体を咎めたり、中傷したりする理由にはならない。特に、フィレンツェでは、悪い市民達の行為は模倣されるよりも、批判され、是正されている。事実、都市が良く確立・統治されても、完全に悪い人のいない都市は一つもない。しかし、少数者の良き性格でも、馬鹿で、ひねくれた暴徒をその非行から実際に救い出し得ないように、少数者のひねくれた性格(perversitas)や悪意(malitia)は、共和国全体が、その徳ある行為の故に、称賛されることから、排除すべきではない。公的な犯罪と私的な犯罪の両方が在り、両者の間には大きな差がある。私的な犯罪は個々の非行者の心がけ(animus)から起こり、公的なそれは都市全体の意志(voluntas)から生まれた。後者の場合、法や伝統により守られてきたものに従うように、一人の意見に従うような問題ではなかった。通常、都市全体は住民の大多数が好むことに従う。他の都市では、少数者がより良き部分を打ち倒したのに対し、フィレンツェでは、より良き者がより多数となった。このため、ヴェリーナの破壊の原因はローマ人の遵法精神だと叱ったり、テルシテスの臆病の原因はアテナイ人の勇敢さだと非難するのと同じように、これは正に間違っていると私を責め立てたり、私に少数の個々人の悪業だと暴かせはしない。

今、もし、私の聴衆が、フィレンツェがいかに秀でた都市であるか、このことは私が筋を立ててながながと称賛してきたことだが、このことを理解しようと望むなら、彼等に全世界を旅行させよう。そして彼等の望ましい都市をどれか選択させ、その都市とフィレンツェを比較させよう。都市の輝きや装飾性—この点では全世界でフィレンツェに匹敵しうるものはない—ではなく、その高貴さ—この分野では他の都市もフィレンツェに第一位の地位を譲るけれども—でもなく、徳や業績で、同じく、比較させよう。もし、彼等がこれらの比較をするなら、フィレンツェと他の都市との間にはどんな差異があるか理解し始めるであろう[f.90 r]。

というのは、これらの称賛に値する分野のどの点に於いても我々のフィレンツェに匹敵しうる都市を他に見出せないからである。「どの点」と述べたが、後にそれを証明するであろう。人々の共通の意見として、あ

る種の徳で際立っていると判断される都市を見出すなら、その都市が優れていると言われるその性格を検証させなさい。そうした特性においてさえ、フィレンツェに劣らない都市を見出せるとは思わない。簡潔に言えば、あらゆる点、即ち、信頼性 (*fides*)、勤勉性 (*industria*)、人間性 (*humanitas*)、魂の高貴さ (*magnitudo animorum*) において、フィレンツェに匹敵する都市は見出し得ない。彼等の好むどんな都市とも比較させなさい。フィレンツェはすべての挑戦を受けて立つであろう。ある特殊な活動分野で偉大な栄光を持っていると考えられる都市を全世界に探させなさい。また、それらの都市の優れていると思われる分野の最も顕著な業績を比較させなさい。自らを欺くことがなければ、フィレンツェに勝っているものを見出すことは出来ないであろう。事実、この都市の優秀さは実際驚きであり、あらゆる点で称賛に値する都市として、現実に比肩しようがない。今や、一誰もがいかなる場合にも常にフィレンツェに譲歩し、ここでは偉大な能力によって遂行されたと我々も見て一つの特質、即ち、実践的知恵 (*prudencia pretermitta*) の如く— この都市が示してきた、現在も示し続けているようなめぐみ (恩恵 *beneficentia*) があつただろうか。というのは、こうした特質は出来るだけ多くの人達を支援したように思えるし、すべての人が、特に、そのほとんどを必要とした人達はその都市の寛大さ (*liberalitas*) を聞き知っていた。本国を追放され、煽動的陰謀に根無し草となった、あるいは、仲間市民の敵対のため土地を失った人達皆が、フィレンツェの寛大さの評判の故に、全ての人の後見人のもとに行く如く、また、唯一の避難所 [f. 90 v] に行く如く、常にフィレンツェにやって来た。これまで、二重の市民権を持つと考えない人はイタリアにはいない。一つは、本来の生まれた都市の市民権、もう一つがフィレンツェ市の市民権である。その結果、フィレンツェが、事実、イタリアのすべての人にとっての共通の祖国 (*communis patria*) や全く安全な避難所となった。ここでは、必要なら誰でもやって来れるし、完璧な好意と最良の寛容さでもって (*summa benignitate*) フィレンツェ人に受け容れられる。事実、この国では、寛容さへの情熱と他人への思いやりが大きかったので、これらの特質が大声で叫ばれ、誰にも公然と認められている。このことから、フィレンツェ人の都市が存続する限り、誰も実際に祖国がないとは考えぬであろう。

現実に達成された寛容さを示す行為は、表明された宣言よりもより多くのことをねらいとしている。逃亡者が、全く価値のない者でないなら、歓迎されるだけでなく、しばしば現物やお金の贈物で援助される。そ

のような贈物に支えられて、亡命者は完全な尊厳を持ってフィレンツェに留まり得たし、あるいは、好むなら、自らの本国に帰り、その地に所有権を回復することも出来る。これらのことは事実ではないか。イタリアを良く思わない人でさえ敢えてこのことを否定したであろうか。否、本国では貧困に打ちひしがれ、あるいは、自らの都市を追放された時、公財政でもって (*pecuniis publicis*) 支援され、フィレンツェ市の良き意志により定住を回復した数えきれない多くの人々によってこの政策は証明されてきた。更に、近隣国家の陰謀、又は、僭主の暴力によって抑圧された時、助言、支援やお金に助けられて、危機を乗り切った多くの都市の例がある。紛争が発生した所へは何処でも対立を調停するために派遣された使節 [の話] は省略しよう。というのは、事実、この都市は調停にその権威を使うことを大いに推進してきた。

近隣 [諸都市] の快適さのためにそうした多くのことを [f. 91 r] 企てたものが非常に心の美しい慈悲深き (*beneficentissima*) [都市] と呼ばれるべきではないか。その多くの徳と業績により実際には十分に称賛されるべきではないか。フィレンツェは決して他の都市に不正を許さなかったし、又は、他の都市が紛争に巻き込まれている時には愚鈍な傍観者に留まることは許されなかった。第一に、フィレンツェは常に言葉と権威を用いて全力で係争を解決しようとする。また、一可能なら— 困難を調停し、説得して和平を結ばせようとする。しかし、これが達成不可能ならば、より強い権力者に脅かされ、不当に傷付けられている方を常に助ける。

かくして、正に当初から、フィレンツェは、弱者 (*imbecilles*) を保護し、イタリアのほとんどいかなる住民も破壊を被らないように保証することを義務と考えてきた。そのため、フィレンツェは、その歴史では、決して楽しみの欲望に導かれなかったし、恐れのために、ある共和国が大きな損害を被ることを許さなかった。他の都市、同盟者、友邦や中立国が危機にある時、安穩に、又、平穩に過ぐす権利を持っているとは考えなかった。むしろフィレンツェは常に自らを奮い立たせ、他の都市の係争を取り上げ、攻撃からそれらを守った。失われると思われるそれらの都市を保護し、軍隊、装備やお金で支援した。

そのために、フィレンツェをその良き意志と寛大さのゆえに誰が称賛できなかつたのか。この種の業績で世界中のどの都市がフィレンツェを凌駕し得たのか。フィレンツェが大金を投じ、他都市の快適さのために大いに苦勞し、危機にある多くの諸都市を庇護しなかつたのだろうか。フィレンツェが危機の時にこれらの諸

都市を庇護したので、彼等は、自然と、フィレンツェを彼等の庇護者（*patrona*）と認め始めた。そして、フィレンツェがそうした庇護者となってから、尊厳、実力、勤勉さや権威においてフィレンツェが他の都市を凌いでいることを、誰が否定するであろうか。この良き意志と寛大さに更に、この都市が常に破ることなく恒久的に〔f. 91 v〕保障した同盟者への素晴らしい信頼が付け加えられた。フィレンツェは、同盟関係に入る前に、それが実際に完全な保護を準備できるかどうか常に注意深く吟味することを、この基本については常に心掛けてきた。その結果、フィレンツェが何かに同意した時、決してその約束を違えなかった。そのために、フィレンツェが当初から考え抜き、その訴えが正しいと信じるようになると、批准したいかなる協定、条約、同盟、誓約や約束もフィレンツェに破らせるように影響を与え得るような方便も有り得なかった。その公約をすべて守ると言う評判以外に共和国の品位に適うものは何もない。逆に、約束を破る事以外に悪い事はない。後者は悪い犯罪者たちの行為で、約束を破るものが共和国の最大の敵となる。彼らの言い分はこうである：“私は言葉では約束したが、心では約束しなかった *Iuravi lingua, mentem iniuratum gero*”。最も正義を重んじる都市（*iustissima civitas*）なら決して許さないことである。

そのため、良き都市は常に十分な考察の後に公約を成すべきであった。あるものと一旦約束を成したら、その有効でないものを除いて、変えることを考えるべきではない。信頼と高潔さがこの都市では高度に尊重されてきたので、それは敵との間に交わした条約さえ良心的に遵守した。その結果、フィレンツェは約束を違えたということで非難されたことはない。このため、フィレンツェの敵さえもその都市が条約に基づいて生きていくことを疑わないし、それらの内でフィレンツェの名は最大限の権威をもたらした。若干の人がフィレンツェの最悪の敵であっても、自らの息子と富をこの住民の保護権のもとに喜んで託したのは明らかにその事実の故である。彼等はこの都市の良き信頼と人間性を信じていた。前者は、フィレンツェが約束したことは何でも守ることを保障したのに対し、後者の特性が、フィレンツェ人をしてかつての不正を許させ、すべての適切な奉仕で供給させることをうながすものと見られてきた。彼等へのその期待には失望はなかった。〔f. 92 r〕事実、フィレンツェ人は細心に財産を管理し、それをそれが属す人々に返し、この住民の良き信頼を信じた人々を正当化した。財産をフィレンツェの配慮に任せるといった模範は直ぐに他の人達に見習われた。というのは、この都市は苦勞して、夫々を正当に扱い、

あらゆることで、そのあらゆる交渉で方便よりも名誉を重視した。事実、名誉でないものは、同時に、決して役に立つものではないとフィレンツェ人には考えられていた。

この都市が授けられていると私が見るこれらの多くの立派な特質の中でも、精神の高貴さ（*magnitudo animorum*）と危険を恐れぬ態度（*pericolorum contentio*）ほど偉大で、抜きん出ているものはない、あるいは、ローマ人の徳や性格と一致するものはない。これは、ローマ人を除けば、一体誰の徳でありえたか。ローマ人はあらゆる時代に戦争に賭け、無数の争いや大戦闘に従事し、そして一より希なことであり、もっと驚くべきことであるのだが―彼等は、最大の危機や困難の時でも、決して自らの目的から動揺することはなかったし、自らの高邁な精神を欠落させることを許さなかった。皇帝（*Cesar*）は門前で怒り、フィレンツェを破壊すると脅かした、そこでは、フィレンツェの敵の一部が殺す準備をして彼に従った。この敵はフィレンツェの一マイル内にキャンプし、都市は敵の軍隊の鋼鉄や喋り声で反響した。ハンニバルさえ、フィレンツェの市壁へのこの怪物が立てた攻撃計画ほど、敵対的意図をもってローマのポルタ＝コリーナに近づきはしなかった。運の悪いことは、都市の一部がまだ強化されていなかったことである。その結果、そこではフィレンツェ人は武器を取って、抵抗を試みることはしないだろうと信じられていた。〔f. 92 v〕事実、最強の都市は彼の脅迫に軽蔑しかみせなかった。敵が数日間市壁の外で誇示したにも拘わらず、フィレンツェ内の人々はまったくいかなる恐怖も感じなかった。むしろ、いかなる危機にも曝されていないかの如く、あるいは、いかなる敵軍も近くにいないかの如く、誰もが仕事に精を出した。どの店も仕事場も開かれ、仕事の停滞や公務の緩みも起こらなかった。皇帝はこれを見て、その都市の優秀さと精神の偉大さに驚き、占領を放棄した。

この都市は抵抗に際して強力であっただけでなく、急襲に対応するに際しては勢力の用い方がもっと見事であった。フィレンツェは攻撃された時以外、何人も傷付けなかったけれども、攻撃に曝された時でも、都市はその品位を維持するに最も強力な戦士になれることを示した。フィレンツェが攻勢に出る時はいつも、その驚くべき称賛や栄光への願望に突き動かされた。そのためフィレンツェは常に好んで大きな困難な問題に挑んだ。危険の大きさや問題の困難さの理由で係争を避けることはなかった。フィレンツェが掌握した幾つかの非常に良く要塞化された都市やフィレンツェが占領した近隣都市の記念品を私は思い出すことができ

る。国外での戦闘でフィレンツェにより達成された軍事上の際立った手柄もあった。しかし、ここでは多くの困難な戦闘について書く時間もないし、多くの大手柄を語ることもできない。それ自体一冊の本が必要である。事実、フィレンツェ人によっていかに個々の手柄が達成されたか、将来書くことを企て、ペーパーにし、そのため、記念にするには大きな本が必要である。現在は、他の事件でフィレンツェ人の〔f. 93 r〕徳がいかに偉大であったか、をうまく理解しうる基礎となる例を一二挙げれば十分であろう。ヴォルテッラはトスカナの古い高貴な町である。しかし、高い山の頂上にあつたため、荷物をもたない人でさえそこに出掛けるのは希である。というのは、最大の困難を克服することに慣れた徳は地勢の険しさも、戦闘の不便さも恐れなかった。そのため、そこに送られたフィレンツェ勢力が山を登っていった時、彼等はより高い位置から下って来た守備隊に出くわした。両軍は直ぐに死闘を繰り広げた。両軍の数はほぼ同数であったが、戦闘能力ではフィレンツェが有利であり、地勢の特徴はヴォルテッラに大いに有利であった。彼等は自らの優れた地勢を活用した。槍と剣でフィレンツェの前進を阻止しただけでなく、山腹から大きな石を転がり落とした。フィレンツェ人は大いに努力して山腹を駆け登った。武器も、石も、敵軍も、地勢の困難さも彼等の攻撃を阻止出来なかった。敵前の山を少しずつ戦って頂上に登り、フィレンツェ人はヴォルテッラ人を市壁の中に閉じ込めた。非常に強力な要塞で守られていたとはいえ、一撃でフィレンツェ人は町の中に入った。フィレンツェ軍は外国のいかなる援助も受けることなくこのことをやりとげた。自らの軍隊だけで戦い、勇敢にフィレンツェは栄光と名誉に包まれた。この業績は他の人々には注目すべきものと見られるはずであった。特に実際にヴォルテッラを見たことのある人達はそれによって特に驚いた。というのも、イタリアではそこほどよりよく要塞化された町は存在しないことがはっきりしているからである。更に、町は、墓と炉（家庭）のために（*pro arcis atque focus*）勇敢に戦う勇氣ある人々に守られていた。だが彼等はより大きな徳力により征服された。

そのため、このよく、要塞化された都市をただの一日で獲得した人達を誰が褒め得ないであろうか。ヴォルテッラを獲得した人達の勇氣を天国においても誰が称賛しないであろうか。この都市により達成された業績〔f. 93 v〕はこうこうだと。その徳と勇敢さはこうこうだと。この同じ魂の高貴さ（*magnitudo animi*）で、度々、シエナ人を打ち倒し、ピーサ人を圧倒し、有力な敵対者や僭主達を打ち砕いた。まだまだ注目す

べきことは、フィレンツェが、自らの利益のためよりも、むしろ、他の人達のために軍事的戦闘を企て、しばしば大きな負担に耐えたことである。フィレンツェが他の〔諸都市〕の自由と安全のために多くの危険を冒したことや、自ら自身の財産以外、他の多くの人々の資産を保護したことは、特に、フィレンツェの信頼と名誉に貢献したにちがいない。フィレンツェと和平を結ぶことが希であった人種のピーサ人は、フィレンツェ人の友人で在り、同盟者であるルッカ人に戦争を開始した。最終的に、両住民間に軍隊が招集され、戦闘が起こった。この戦闘でルッカ軍は打ち負かされ、その多くが捕らえられた。その時、フィレンツェ人はピストイアの田舎に陣を張り、彼等の友人達の間で何が起こったか聞き知って、勇氣を失うことなく、あるいは、先の勝利で意気上がるピーサ人達を恐れなかった。むしろ、フィレンツェ人は陣をたたんで、勝利者を捕らえようと急ぎ、ピーサ人が彼等の市壁内に安全に逃げ込むことを阻止することに成功した。フィレンツェ人は直接ピーサ人との戦闘に加わり、戦争の命運を変えた。以前囚人であったルッカ人は、今度は屠殺者として、残っていたピーサ人の多数を捕らえて、鎖に繋いでルッカ市に送った。こうしてフィレンツェ人の軍事的勇敢さがルッカ人を救い出し、ピーサ人の勝利を覆した。そして彼等のために称賛と名誉を勝ち取った。しかし、こうした顕著なフィレンツェの勝利で何が最も称賛されるべきか。彼等に勝利をもたらしたのは彼等の徳か、勝利に酔うピーサ人を追及させた魂の高貴さか、友人の安全のために大いなる戦闘を企てさせた他人を思いやる心（*beneficentia*）か。

これらの三点は称賛すべき同じ一つの行為とみなされるべきだと私は思う。しかし、私はそれに相応しい称賛であらゆる偉業〔f. 94 r〕を称賛することはできない。十分な時間のないことを恐れるだけでなく、より大きな事件が私の注目を求めている。フィレンツェが良き意志（慈善 *benefica*）を示したのはあれやこれやの都市にだけではなく、イタリア全体にも示したのである。もしフィレンツェが自らの安全のためにのみ努力したのであれば、正に小さな重要性しか持たない行為としてしか評価されない。しかし、もし多くの国の住民がフィレンツェの努力の成果を知り、それを享受したなら、それは栄光あることだ。事実、戦争している近隣諸都市の安全を守ろうとする願望にフィレンツェが常に動かされたのは事実である。ある都市が近隣の僭主、あるいは、近隣住民の貪欲な願望に脅かされた時は何時でも、フィレンツェは攻撃者に反対した。そこで、フィレンツェがこれらを自らの本国と同様に扱い、イタリア全土の自由のために（*pro universe*



libertate Italiae) 戦ったことは、誰にとっても、常に明白であった。事実、フィレンツェが鼓舞されなければ、あるいは、神の大いなる愛 (plurimus Dei favor) が、その聖なる正しい意志の任意の行動に (pie justeque voluntati Dei) 同調しなければ、この都市は目的を達成し得なかつただろう。

私は古い事例に立ち帰りたくない。むしろ、我々の時代に見たことを語ろう。イタリア全体が、一度ならず、フィレンツェにより、奴隷の鎖から解放されたことはいかなる場合にも明白であると思う。これらの他の事例を省略し、正に最近おこなわれたことのみ考察しよう。

この一つの都市がその軍隊と賢明な戦略でもって彼の権力に抵抗しなかつたなら、全イタリアは敵のロンバルディア公の権力下に (in potestate ligustini) 落ちたであろうことを否定する知能の弱い又は真実に欠ける人があるだろうか。イタリア中にそうした敵に対抗しうる権力又は財力を持ったものがあるだろうか。その名前そのものがすべての人に恐怖をもたらすその敵の攻撃を最後まで誰が持ち堪えたか。事実、彼の評判はイタリアだけでなくアルプス以北の人々にも恐怖を植え付けた。彼は物資・金・人に恵まれ、しかし、とりわけ、巧妙な政治的知恵を持っていた。そして、彼は大きな恐るべき権力 [f. 94 v] を持っていた。ロンバルディアのすべてと、アルプスからトスカナやローマニアまでの間の、半島のほぼ全ての都市が彼の支配下に入り、彼の命令に従った。トスカナ地方では、彼はビーサ、シエナ、ペルージアとアッシジを掌握した。ついにはボローニャさえ占領した。更に多くの都市や多くの有力貴族が、恐怖から、あるいは戦利品の魅力に引かれて、或いは、多分彼の策略に乗って、彼の名声と命運に従った。彼の仲間達は財政的報酬、贈物や助言に事欠かなかつた。事実、彼は幸福になりえた、もし彼が良き技術のもとに自らの勤勉さ、用心深さや巧妙さを使いさえしたら、遙かに、大成功し得た。より賢明でより鋭い忠告する味方は彼にはいなかった。彼を遮るものは知らないし、彼を脅迫するものは残っていなかった。そして、彼は他に友人を求めた、金で友人を、高価な贈物で友人を、思いやりの見せかけの約束で他に友人を求めた。不和の種を蒔き、彼はイタリアの全住民の共倒れを狙った。住民がへとへとになると、彼は進み出て、自らの圧倒的な力で住民を征服した。結局、彼の巧妙なやり方は何処でも成功した。このため、多くの政府は、これらの大きな権力を見て、大変恐れ、一時凌ぎをし始めた。しかし、フィレンツェ人の偉大な魂は恐れを知らず、あるいは、その名誉の一部さえ屈服させることは考えなかつた。イタリアの

自由をその敵から守るのはローマの生き方であることを知っていた。

その祖先はキンブリ人、チュートン人やガリア人とよく戦った。これらの先人達はプウルスの凶暴さ、あるいはハンニバルの策略を恐れなかつた。あるいは、彼等は自分達の品位、又は、偉大さを維持する努力を決して怠らなかつた。むしろ、素晴らしい伝統を維持するためには、[f. 95 r] 大きな苦勞を背負った。そこで、フィレンツェ人は、先人から伝達された良き評判を生み出すことは何でもする覚悟をしていた。フィレンツェの住民が偉大で高邁な精神で戦争を始めたのはこれらのことを思つてのことである。そこで、この住民は栄光の中に生き、またそのために勇敢に戦つて死ぬことを考えていた。更に、フィレンツェ人は、先人から伝達された地位が維持されなくてはならないと信じて、自分達自身の評判以上には富に関心を示すことは出来なかつた。事実、彼等の自由を維持するためにお金と自らの命すら賭ける覚悟をして、自分達の地位を賢明さと勇敢さの両面から考えていた。今や、富・金とそうしたことは勝利者の報酬である。しかし、戦争で自らの富を保持すべきであると考えた人達は、この富をもっと確かなものにしようと思う故に、現実には、自分達自身よりも敵の利益に奉仕することになる。

従つて、そうした精神を授けられたこの都市は強力で財力のある敵と最も大いなる徳を以て戦い、少し前まで全イタリアを震撼させたうえ、いかなる者も彼には抵抗しえぬと信じられていたこの敵をしてフィレンツェは和平を望ませ、パヴィアの市壁の前でがたがたと震えさせた。結局、敵はトスカナ地方とローマニア地方の諸都市を放棄しただけでなく、北イタリアの大部分をも失った。おお、なんとこの都市の信じがたいほどの壮大さと徳か！ おお、真実ローマの民で、ロムルスの末裔であることか！ その精神の優秀性とその業績の偉大さの故に大いなる名誉でもってフィレンツェの名を尊ばないものがあるか。この都市が達成できたことは何と大きく、際立っていることか。その努力と財力によって奴隷となる脅威から全イタリアを解放することほど先人の徳が存続していることをうまく証明してくれるものはない。この結果、この都市は毎日すべての住民からお祝いや賛辞やお礼を受けている。しかし、これらのすべての業績は正に不滅の神から授けられたものである。常に一定の謙遜さを持ちつつ、フィレンツェは、その業績をそれ自らの徳 (実力) により得たとするよりも、[f. 95 v] 神の恩寵で (Dei beneficio) 得たとすることを好んだ。その結果、フィレンツェはその成功に奢ることもなかつたし、その勝利は、当然の如く、憎んできたものすべてに向けられ

る復讐を決して伴わなかった。むしろ、征服したものに対しては常に完全な人間性 (summa humanitas) を維持した。そこで、戦争の時にはフィレンツェ人の強力さ (fortitudo) を知った人々は、勝利の時にはその慈悲 (clementia) を経験した。この都市の最高の徳の内、次の一つが際立っている。即ち、あらゆる時にその尊厳 (dignitas) を維持すること。フィレンツェは偉大な業績を達成する過程でその尊厳を保つことほど関心を払ったものはない。そのため、フィレンツェはその成功に直ぐに奢ることなく、又は、逆の時にも落ち込まなかった。成功には謙遜を (modestia in secundis)、逆境には志操堅固を (constantia in adversis)、あらゆるものには真の正義と賢明さ (justitia vera et prudentia in omnibus) を保った。この結果、フィレンツェの偉大な名は人々の間で最大の栄光を勝ち得てきた。

## 翻訳テキスト

レオナルド=ブルーニ作、『フィレンツェ市讃美についての演説』は、以下の三つから試訳したものである。まず、ラテン語テキストの定本として(1)を用いた。これとの比較には、(2)を参照した。さらに、その翻訳である(3)はこの試訳において大いに参考にした。

- (1) Oratio de laudibus Florentine urbis (Vittorio Zaccaria, Pier Candido Decembrio e Leonardo Bruni, in *Studi Medievali* 3rd. ser 8, 1967, pp. 529-54)
- (2) LEONARDO ARETINI ORATIO DE LAUDIBUS FLORENTINAE URBIS, (Hans Baron, *From Petrarch to Leonardo Bruni*, Chicago 1968, pp. 232-63)
- (3) Panegyric to the City of Florence, trans. by Benjamin G. Kohl (B.G. Kohl & R.G. Witt, ed., *The Earthly Republic*, Pennsylvania U.P. 1978, pp. 135-175.)